

巻頭言

中央大学附属中学校・高等学校

学校長 石田雄一

『教育・研究』の今号は、昨年度の第35号とは少し趣が異なり、探究型の授業に関する報告が多く寄せられている。とりわけ「教養総合Ⅰ」（新カリキュラムでは「教養総合Ⅱ」に名称変更）に関する報告が合わせて5本と多い。近年、中等教育において「探究的な活動」に重点が置かれるようになり、多くの学校で、課題探究型の授業に関する思考錯誤が始まっている今日、各校の教員が自らの試みを、紀要等を通じて互いに紹介し合うことは極めて重要である。そうした観点からも、今号は他校の方々に本校の取り組みを知って頂くという点で貴重な資料となっているので、学校外の読者のために「教養総合Ⅰ」という授業について、この場を借りて簡単に紹介しておこう。

「教養総合Ⅰ」は、修学旅行に代わるものとして高校2年生を対象に始まったグループごとの研究旅行を出発点とし、それに事前学習や事後学習が加わり、正規の授業としてカリキュラムに組み込まれるようになったものである。この授業の講座には、今回の寄稿で紹介されている「アントレプレナーシップ入門」や「ランカウイ島研究旅行」、「国際化と日本」、「マレーシア・ボルネオのジャングル自然調査」、「中世都市クラクフとアウシュヴィツツビルケナウ強制収容所」のように海外研修を伴うものが多い。それだけに、2020年以降、コロナ禍によって大きな影響を受けたことは、各執筆者がそれぞれの報告の冒頭で記している通りである。

本校の探究型の授業には、他にも「教養総合Ⅱ選択科目」（新カリキュラムでは「教養総合Ⅲ選択科目」）があり、これは高校3年生を対象にした教科横断型の授業で、大学での学びを意識したもので、複数の講座が設けられている（今号では「美術製作から学ぶ歴史」という講座が紹介されている）。

本校は、学習指導要領で「主体的で対話的な深い学び」が重視されるよりも前から、生徒主体の授業を発展させてきた長い歴史がある。多くの教員から寄せられた多くの実践報告は、本校が探究型の授業の先進的な学校であることを裏づけている。こうした探究型授業の教育効果に関して本校は「コンピテンシー自己評価アンケート」によって経年的な追跡調査を行っており、それに関する報告も今号に寄せられているので、本校教員のみならず、学校外の読者にも是非とも一読を勧めたい。

しかし、本校の探究型授業は、試行錯誤の長い歴史にのみ支えられているわけではない。生徒を主体的な探究活動に導いていくために

は、教員の側にも学術的経験が求められることは言うまでもない。本号に寄せられた複数の研究論文は、教員たちが自ら研究者として研鑽を重ねている証である。

前号で書いたことだが、本校の紀要は、『教育・研究』というその名の通り、「教育」と「研究」という密接に結びついた二つの活動の精華である。『教育・研究』は生徒の主体的な探究活動を促すという時代の要請にこたえるべく本校教員が研鑽に励む場として、これまで以上に重要な役割を担うことになるだろう。

最後になるが、本号の編集の作業を取り纏めて頂いた北島咲江教諭、平野誠教諭には心より感謝を申し上げたい。